

古代山城にみる渡来系技術

亀田 修一 (岡山理科大学特任教授)

1. はじめに

日本列島の古代山城には朝鮮式山城と呼ばれているものと神籠石系山城と呼ばれているものがある。前者は『日本書紀』や『続日本紀』などの記録にみられるもので、後者はその本来の名前は分からぬが、列石を伴う土塁や水門の遺構などから古代の山城と考えられているものである。特に後者に関しては、土塁前面下部の列石が大きな特徴として認識されている。

朝鮮式山城は、齊明天皇6（660）年の百濟滅亡、天智天皇2（663）年の白村江の戦いにおける敗戦、百濟からの多くの人々の亡命・移住、唐・新羅が日本列島へ攻めてくるのではないかという危機感などから築かれたと考えられている（森1998、鈴木2011など）。敗戦の翌年、天智天皇3（664）年に、まず水城（福岡県太宰府市など）が築かれる。翌4（665）年、長門国の城、筑紫国の大野城・^き橡城が百濟からの亡命貴族（将軍）達率答^{だちそちとうほんしゅんそ}体^{おくらいふくくる}春初^{しひふくぶ}、達率憶^{おも}禮福^{ふく}留^る・達率四比福夫^{ふく}らによって築かれる。さらに6（667）年、倭国^{たかやす}の高安城、讃吉国^{やしま}山田郡の屋嶋城、対馬国^{かなた}の金田城が築かれる。そして文武天皇2（698）年、大宰府に大野・基肄^{くき}・鞠智^{くち}の3つの城を繕治させている。一方、高安城は大宝元（701）年に廃され、備後茨城^{うまのき}・常城城^{とこのき}は養老3（719）年に停止されたことが記されている。

このように記録にみられ、所在地がおおよそ確認されている朝鮮式山城が6カ所、記録にはみられないが、その遺跡が確認されている神籠石系山城が16カ所、合計22カ所の古代山城が確認されている。そして、記録はあるが、その所在地などがわかっていないものが5カ所あり、これに中国系山城といわれている怡土城を含めると、合計28カ所の古代山城があることになる。小稿では怡土城と所在地不明の5カ所の山城は外して述べていく⁽¹⁾。

朝鮮式山城は上記のように百濟の亡命貴族（將軍）が指導して築かれたことがわかるが、具体的にどのような「知識や情報や技術」が使用されて神籠石系山城も含めた古代山城が築かれたのか。筆者のこれまで発表してきた論文（亀田1995・2002・2009・2014～2016・2018・2021など）など参考にしながら考古学的な研究成果によって古代山城の「広義の渡来系技術」について見ていただきたい。

2. 渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構

(1) 選地・周辺遺跡・規模・縄張・高さ・比高差

選地・周辺遺跡 北部九州から瀬戸内海沿岸地域を経て、大和までの範囲内でどのような場所が選ばれたのか（図1）。まず、玄界灘沿岸から有明海北部沿岸までの地域で、大宰府を中心とする地域、朝倉橋広庭宮を中心とする地域などが防御の拠点であると考えられている。海からの攻撃と、上陸してのちの主要交通路（のちの官道など）沿いの重要な場所に山城が築かれたと考えられている。大宰府の周囲には大野城（入佐・小澤2010、下原2016）・基肄城（田中正弘2016）・阿志岐城跡（小鹿野2016）と水城（杉原2016）および関連土壙などがあり、朝倉橋広庭宮推定地の近くには杷木神籠石がある。のちの国府などの地域拠点周辺に関しては、高良山神籠石の麓に筑後国府関連遺跡群がある

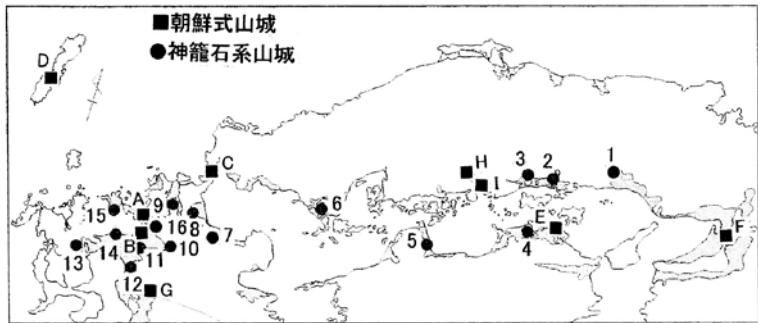


図1 古代山城の分布

A. 大野城跡 B. 基肄城跡 C. 長門城 D. 金田城跡 E. 屋嶋城跡
F. 高安城跡 G. 鞠智城後 H. 常城 I. 茨城

1. 播磨城山城跡 2. 大廻小廻山城 3. 鬼ノ城 4. 讃岐城山城跡
5. 永納山城跡 6. 石城山神籠石 7. 唐原山城後 8. 御所ヶ谷神籠石
9. 鹿毛馬神籠石 10. 柏木神籠石 11. 高良山神籠石 12. 女山神籠石
13. おつぼ山神籠石 14. 帯隈山神籠石 15. 雷山神籠石 16. 阿志岐城跡

は備前国府推定地とはかなり離れている。

以上のような選地については、北部九州から大和までの陸路・海路の両方をある程度理解しておけば可能であろう。つまりヤマト王権側のそれなりに築城に関する知識を持つ人物であるならば、古代山城の選地は可能であろう。ただ、当時古代山城に関する知識を有した人物については全くの日本列島の人物もいたかと思うが、その近くには朝鮮半島との往来に関する知識や情報をもつ渡来系の人物がいた可能性はあると思う。一方、百濟からの亡命貴族（将軍）クラスの人物が選地の責任者である場合も、彼らだけで築城の場所を選ぶのはやはり難しいのではないかと考えている。それぞれの地域の地勢情報（眺望・周辺の交通網・水があるのかなど）に詳しい人物、全くの一般の日本列島の人物もいたであろうし、多少なりとも築城に関する情報や知識を持った渡来系の人物などの存在も必要であろう。

つまり、北部九州から大和までの古代山城の選地に関しては、朝鮮半島での城作りに慣れた人物はやはり必要であり、地元の日本列島人や渡来系の人々の協力も必要であったと考えている。

繩張・高さ・比高差 なわぱり 繩張に関しては、7世紀

以前に朝鮮半島の山城に類するものは基本的に日本列島には存在しない。弥生時代の環濠集落や高地性集落、古墳時代の豪族居館などの中に朝鮮半島の古代山城と類似するものがないわけではないが、弥生時代のものは時間的に間があきすぎであり、古墳時代のものは規模的にも小さい。朝鮮式山城のように城周2、3kmに及んで山の頂部付近を城壁がめぐる形態のものは古代山城築城以前の日本列島にはやはりないといえよう。ちなみ

が、そのほかの朝鮮式山城・神籠石系山城の近くにはよくわからない。

次にこの北部九州から河内・大和までであるが、瀬戸内海沿岸の各国に1、2カ所ずつ築かれている。国府関連遺跡との関係が比較的推測しやすい例は備中鬼ノ城（総社市2005・2006、岡山県2006・2013、平井2016）と伊予永納山城跡（西条市2016）、そして讃岐城山城跡（古代山城研究会1996）くらいで、そのほかは交通の要衝にはあるが、特定の拠点との関わりはあまり明確ではないようである。たとえば、備前大廻小廻山城（岡山市1989）

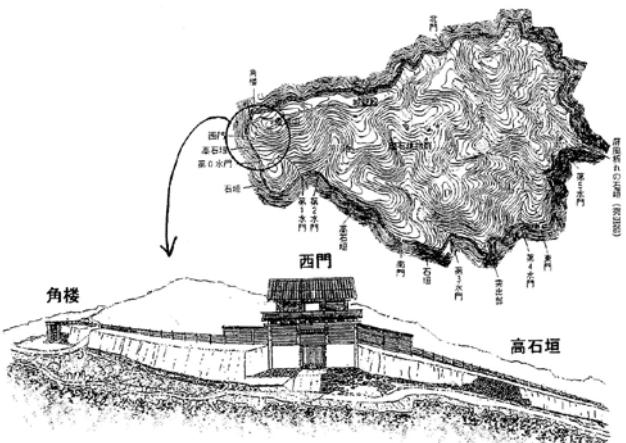


図2 備中鬼ノ城全体図と西門付近イメージ図

に、のちの日本列島の中世山城は尾根線上をおもに利用して郭（平坦面）を作っており、基本的に異なる。

古代山城については、その山のどの部分に城壁をめぐらすのかなどによって鉢巻式、包谷式などに分類されているが、実際には山の形などによって多様である。また標高の高低差も、最低所がほとんど平地に接する肥前おつぼ山神籠石、筑前鹿毛馬神籠石、豊前唐原山城跡（大平村2003・2005）などから、最低所と平地との比高差が200m以上ある筑前雷山神籠石、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、讃岐屋嶋城跡（高松市2016、渡邊2016）など多様である。筑前大野城跡や肥前基肄城跡は平地との比高差は130～140mであり、肥後鞠智城跡（熊本県2012、矢野2016）は約30mとかなり近い。また崖の上に築かれた印象がある対馬金田城跡（田中淳也2016）も西から北側は比高差が100m以上あるが、東側、特に二ノ城戸付近では海との比高差は22mほどしかなく、海までの距離も100m弱である。ちなみに備中鬼ノ城の比高差は約250mである。

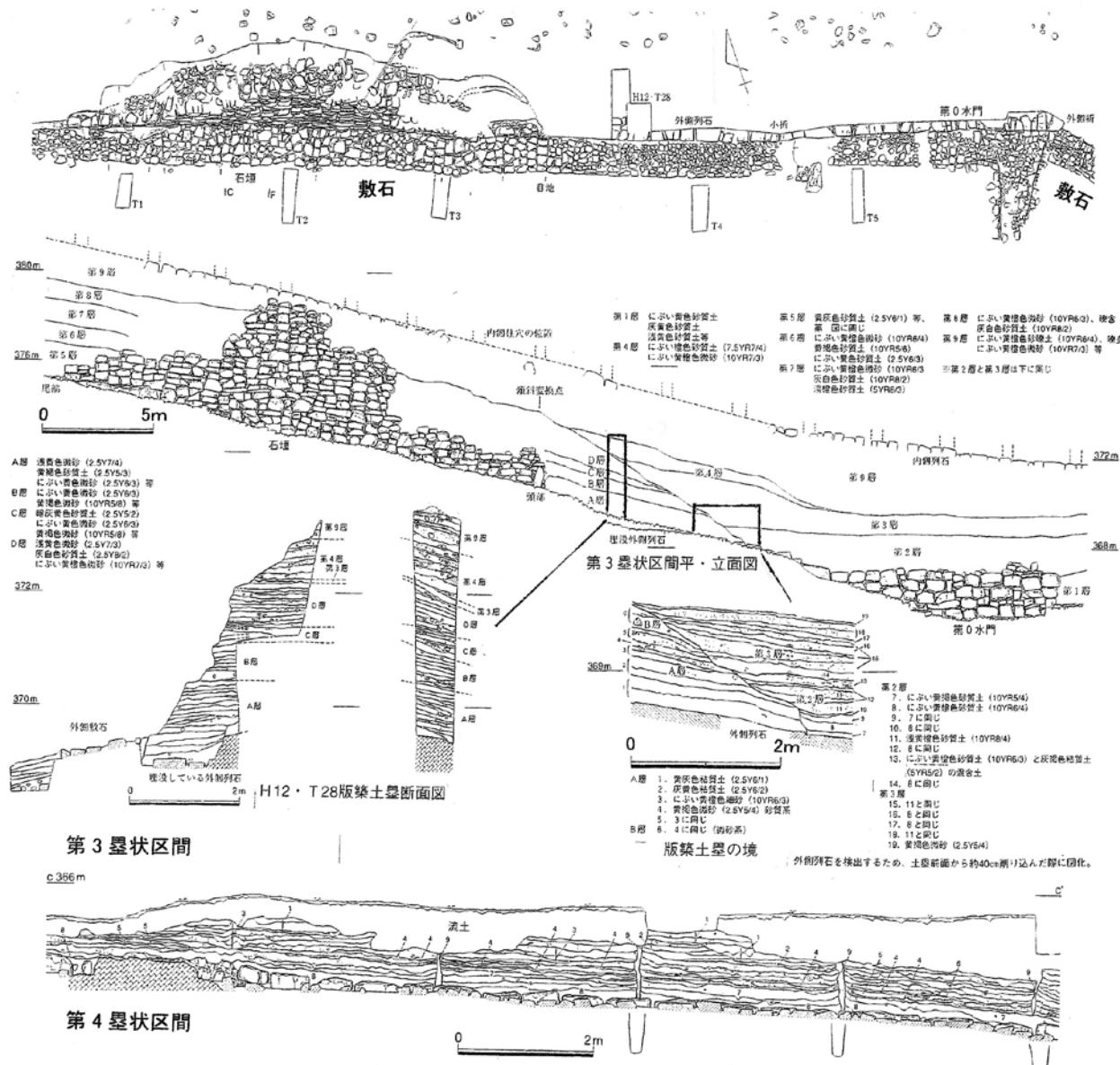


図3 備中鬼ノ城第3・4墨状区間の土墨・石垣

このように平地との比高差は、朝鮮半島の山城も同様であり、百濟からの亡命貴族たちが直接・間接的に築城に関与した可能性は高く、日本列島の古代山城の選地や規模などについては渡来系の知識・情報・技術が活用されたものと考えている。ちなみに、日本列島の古代山城の規模に関しても城周がおよそ2、3kmであること、百濟における地域拠点の城の規模を反映していると思われる（図4、亀田1995）。

（2）外郭構造

①城壁

土と石 朝鮮半島の古代山城に関しては、そぞり立つ石の城壁がよく紹介され、一般的に石の城がほとんどのようなイメージがあるが、少なくとも百濟の中心域である忠清南道では土城と石城の数は半々であり、王都が置かれた公州や扶余地域では約7割が土城である（亀田1995）。つまり日本列島に山城を伝えた百濟地域の山城は少なくとも土城がそれなりの数は存在するのである。

西日本の古代山城に関しては、石城は対馬金田城跡のみで、よく石垣の写真が紹介される備中鬼ノ城もほとんどは土で築かれている（図3）。また讃岐屋嶋城跡に関しても、確認されている門跡付近の城壁は石で築かれているが、そのほかの部分に関しては、切り立った崖をそのまま使用した可能性も推測され、その上に土塁が築かれている可能性も無視できないのである。このように西日本の朝鮮式山城・神籠石系山城は基本的に土で築かれた土城で、谷部などに石垣が使用されたと考えられる。

そのような意味で対馬金田城跡は特異である。金田城が築かれた場所が基本的に岩山であるという地理的な条件にもよるのであるが、少なくとも当時の日本列島において約3mを超える石垣（石築城壁）を築く技術はなく、やはり渡来系の人たちによる指導・実際の施工がなければ、難しかったと考えられる（田中淳也2016、亀田2012）。また、備中鬼ノ城も基本は土塁であるが、西門跡南東側の高石垣は5mを超え、少なくとも渡来系の技術者たちの指導がなければ難しかったのではないであろうか（図3、亀田2021）。

版築 土の城壁は一般的に版築土塁で築かれている。「版築」は新村出編2013『広辞苑 第6版』岩波書店では、「板でわくを作り、土をその中に盛り、一層ずつ杵で突き固めるもの」とあり、日本列島では、古代寺院の基壇構築に使用され始めたと考えられている。一部、古墳の中に「版築状」や「層状」積み土と呼んでその関連も推測されているが、ひとまず588年に造営が開始された大和飛鳥寺が最古の版築の使用と考えられている。

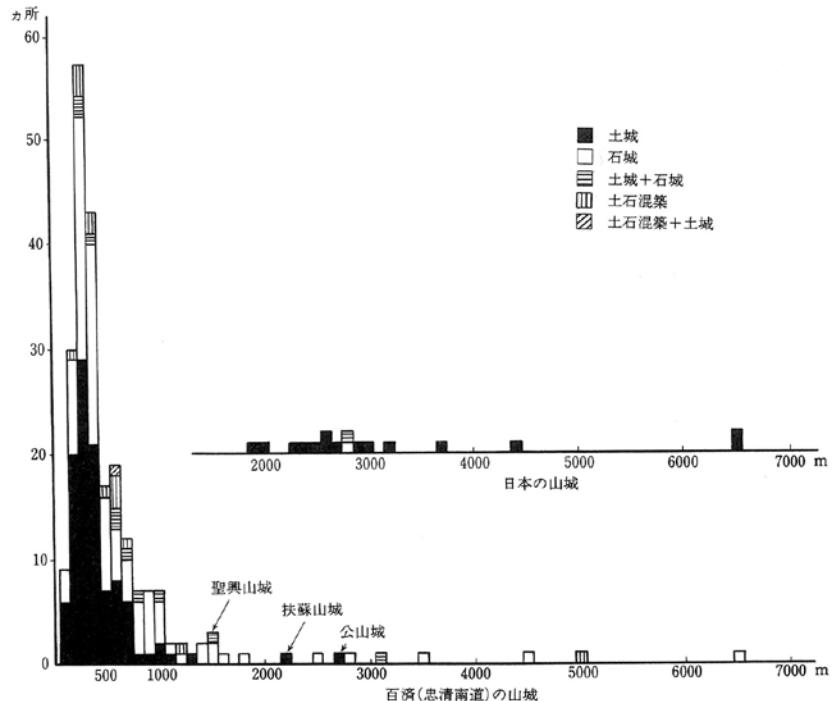


図4 百濟と日本の山城の大きさと数

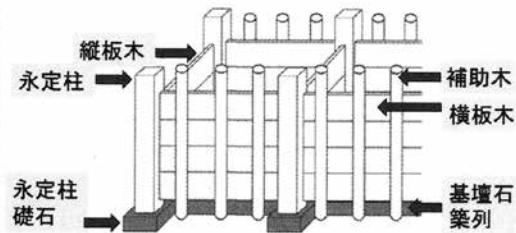
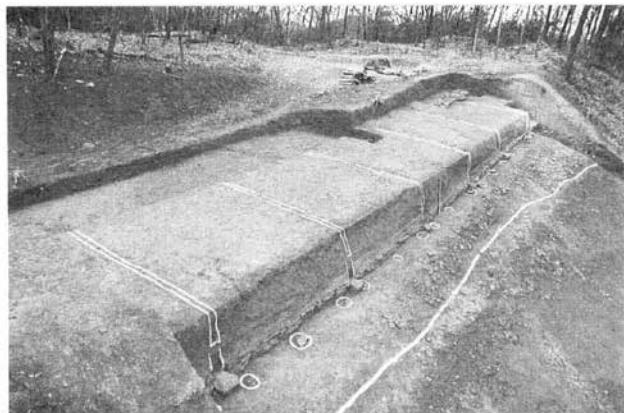


図5 仁川市江華島玉林里遺跡
江華中城（1250年）土壘と模式図

そういう意味では、古代山城の「版築」については、飛鳥寺など古代寺院に使用され始めた「版築」が古代山城にも使用されたとも考えられるが、百濟からの亡命貴族（将軍）・工兵部隊の責任者クラスの人物などが665年の大野城などの山城築城時に独自に指導して、この版築技術を地元の人々に指導して作らせた可能性も十分考えられる。ちなみに大野城が築かれた筑前地域の665年以前創建の古代寺院は明確ではなく、筑後上岩田遺跡土壇がその可能性があるくらいで、九州全域でも確実に665年以前築造と推測できる古代寺院はよくわかっていない。

つまり、水城・大野城・基肄城などの版築土壘構築には北部九州の古代寺院の版築技術が使用された可能性は当然あるが、百濟系亡命貴族（将軍）・工兵部隊の責任者クラスの人物などが地元の人々を使って、彼らの技術とともに新たな版築技術を教えて築いた可能性が高そうである。

敷粗朶工法 敷粗朶工法は中国漢代の池の堤などに使用され、おもに水気のあるところの土手（堤・土壘）などに使用される工法で（大阪府立狭山池博物館2021）、日本列島では岡山県倉敷市上東遺跡の弥生時代後期の港関連の堤で確認され、少なくとも弥生時代から存在していたことがわかっている

（岡山県2001）。ただ、この工法は日本列島には定着しなかったようで、7世紀半ばの奈良県山田道遺跡（小田ほか2008）で確認され、そして7世紀後半の福岡県水城跡（大堤）（図6-2、九州歴史資料館2009）で見ることができる。大土居水城跡の土壘の下層（春日市2000など）でもその可能性のあるものが見つかっている。

朝鮮半島での敷粗朶工法については、城関係ではソウル風納土城の城壁（4～5世紀）（国立文化財研究所2002）で検出され、扶余羅城（6世紀）においても検出されている。扶余羅城では、前述の陵山里寺跡南側の羅城東門跡の南側で検出されている（図6-1、国立扶余博物館2003）。使用される場所はやはり水気のあるところで、中国・日本列島での使用例と同じで、大宰府水城大堤はまさに扶余羅城の敷粗朶工法とつながるものではないかと推測している。

列石 神籠石系山城の土壘基礎部には基本的に切石や割石の列石を並

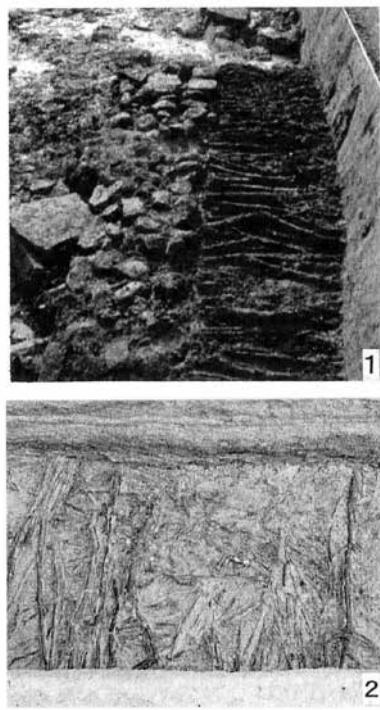


図6 百濟と日本の敷粗朶工法
1.扶余羅城南側土壘前面敷粗朶 2.太宰府市水城跡敷粗朶

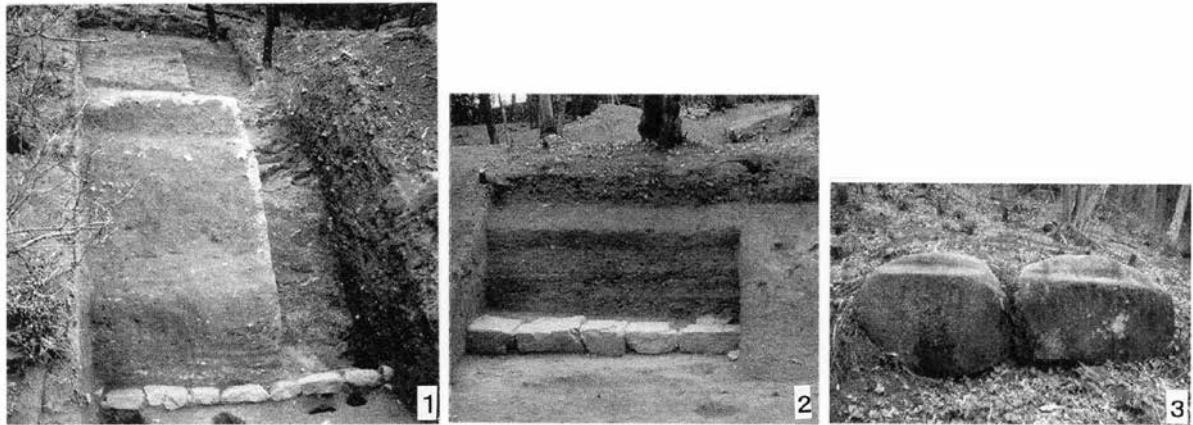


図7 百濟と日本の土墨と列石
1.益山市益山猪土城 2.備前大廻小廻山城 3.豊前唐原山城

べ、この列石が朝鮮式山城との区分の大きな目安となり、切石の列石が北部九州の「神籠石」を象徴している（図7-2・3）。そして瀬戸内海沿岸地域の神籠石系山城では一部周防石城山神籠石に切石加工した石材が使用されているが、基本的に割石・一部自然石で、九州と瀬戸内の神籠石系山城の違いを示している。また、北部九州の切石列石には硬い花崗岩が使用されてものが比較的多く、これも特徴の一つとなっている。

一方、朝鮮式山城ではこのような切石・割石の列石はないと考えられていたが、調査が進む中で、比較的小型の割石や自然石を基礎部に並べた土墨が筑前大野城跡や肥後鞠智城跡で検出され、朝鮮式山城と神籠石系山城の近さが認識されるようになった。特に對馬金田城跡のビングシ門跡付近の土墨の基礎部でごく小範囲であるが、備中鬼ノ城の列石と類似した大きめの石材が確認された。この石材をどのように理解するのか、今後の調査に期待したい。

ただ、このような土墨基礎部の切石列石は朝鮮半島では明確に確認されておらず、北部九州の古墳の花崗岩加工技術が使用されたのではないかと考えられている。割石列石を土墨基礎部に設置した割石列石土墨もその例がほとんど知られておらず、この関連がよくわからていなかった。しかし、百濟時代のものと推測される全羅北道益山猪土城で割石列石土墨は確認されている（図7-1、亀田2016b、金善基・趙相美2001）。切石列石土墨は今後の検討課題であるが、花崗岩の切石加工技術は6世紀末～7世紀初め頃に百濟から飛鳥地域や西日本各地に伝えられたようであり、その技術が西日本の古代山城



図8 高句麗と日本の逆L字形段加工石材
1.集安將軍塚古墳1号陪塚 2.豊前唐原山城跡第1水門跡(北より) 3.豊前唐原山城跡第1水門跡(西より)

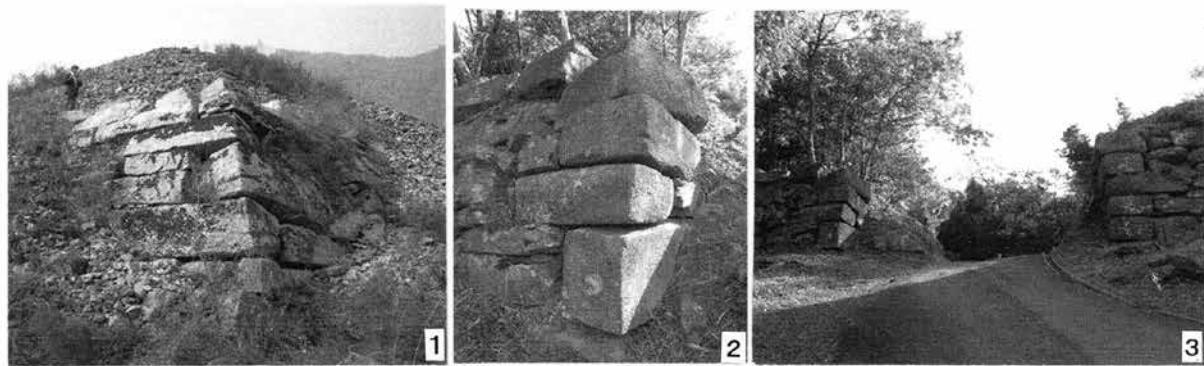


図9 高句麗古墳と日本古代山城の算木積
1.集安西大塚古墳南東隅角部 2.讃岐城山城跡城門北側石積み(西より) 3.讃岐城山城跡城門(西より)

に使用された可能性はある。現時点では、西日本の7世紀中頃以前の花崗岩切石礎石の加工技術が古代山城の切石列石などに使用された可能性と、新たに7世紀中頃に入ってきた花崗岩加工技術が古代山城の列石などに使用された両方の可能性がありそうである（亀田2001）。

列石・石垣の石材加工と石積み 上記のように九州の神籠石系山城の列石は基本的にきれいに加工されており、いわゆる切石になっている。特に上前面を鍵形（L字形）に加工するものが比較的見られる。この上面鍵形加工は、本来この加工面まで土墨を削り出すためのものと推測される。

九州の列石石材は、上面鍵形加工のほかは基本的に正面を方形に加工しているが、豊前唐原山城跡（大平村教育委員会2003・2005）には逆に上部前面側を少し高くして、後側を低くした逆L字形のものがある。このような加工は筑前阿志岐城跡で類似したものが見られるだけである。豊前唐原山城跡や筑前阿志岐城跡の上前面を一段高く加工して石材を積み上げる方法は日本列島の古代山城では基本的に見ることができず、高句麗の古墳や山城の石積みにおいて見ることができ、高句麗の石材加工技術とつながる可能性がある。さらに筑前阿志岐城跡ではこのような加工がない石材に関しても積み上げるときに前面を少し下げて階段状に積んだ部分がある。このように上の石を少し後ろに下げるに意味があれば、やはりこれも高句麗の石材の積み方に繋がるのかもしれない（図8）。

また、日本列島の中世から近世の城の石垣の石組みにおいて、隅角に「算木積」と呼ばれる積み方がある。この中近世の「算木積」の起源についてはよくわかっていないが、讃岐城山城跡の城門跡で見ることができる（図9-2・3）。この城門跡については、「算木積」で積まれているため新しく積まれたのではないかという意見もある。しかし、筆者は以前中国集安に行く機会があり、図9-1のような

「算木積」で築かれた西大塚古墳（積石塚）を見学した。この古墳は4世紀代のものと考えられており、隅角には積み直しは確認できなかった。つまり高句麗と讃岐の「算木積」については4世紀

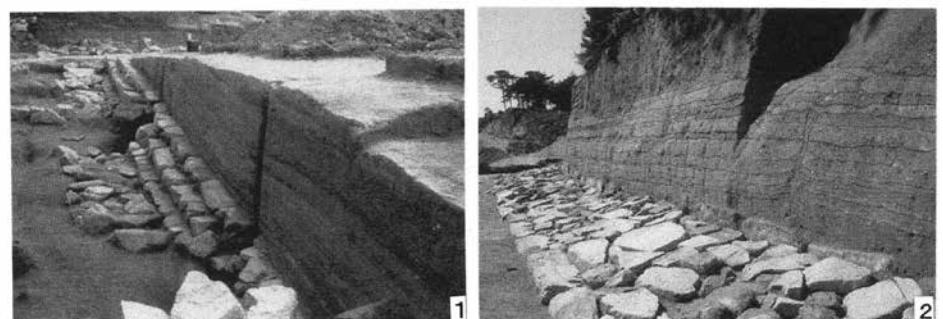


図10 百濟・新羅と日本の土墨前面石敷き
1.忠清北道稷山蛇山城 2.備中鬼ノ城

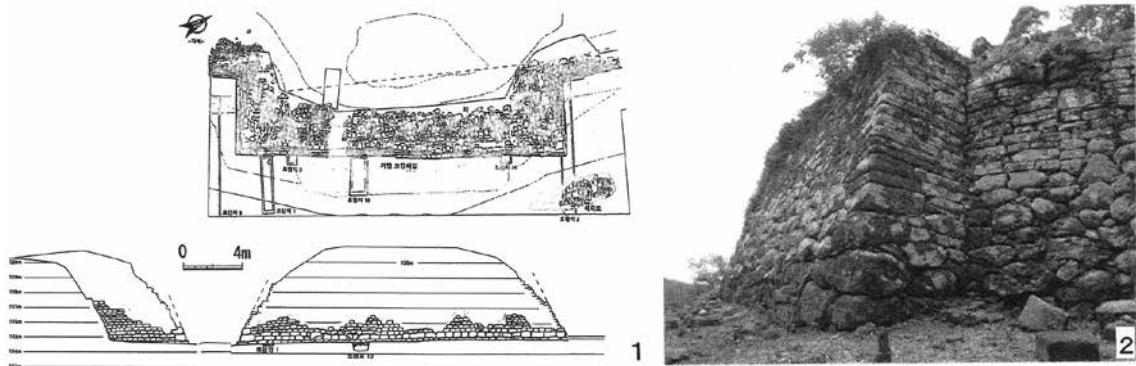


図11 百濟と日本の雉城
1.忠清南道扶余羅城東羅城雉城 2.対馬金田城跡雉城

と7世紀という時間的な差があり、これらをどのように説明することができるのか、現時点ではわからないが、少なくともそれぞれが「算木積」であることは間違いないと思われ、宿題としておきたい。

敷石 例は極めて少ないが、備中鬼ノ城の土壘の内外裾部で敷石が確認されている。外面の敷石の場合、土壘前面の柱は切断されるなどしてその上に石が敷かれたことになる。ほかに土壘の外側の敷石は筑前大野城跡小石垣地区でのみ検出されている。朝鮮半島では忠清北道櫻山蛇山城跡などで検出されている（図10-1）。ただ、朝鮮半島でも例は少ないようである。

雉（雉城） 雉（雉城）は城壁の外面に上から見て、方形または半円形に突出させた構築物で、敵が城壁に迫ってきたときに、側面からも攻撃できる極めて有効な防御施設である。形態、地域によって雉城、曲城、馬面などとも呼ばれている。この雉が角を持つ城のコーナー部分に設けられ、その上に建物が建てられている場合、「角楼」と呼ばれている。

日本列島ではこの雉に関しては、古くから対馬金田城跡の一ノ城戸（図11-2）が注目されていたが、後世の作り直しではないかとの意見もあった。しかし、備中鬼ノ城（図12-1）の調査で初めて古代山城に伴うものが確認され、対馬金田城跡のものも上部は改変されているが、基礎部は当時のものと考えられるようになった。さらに讃岐屋嶋城跡の浦生石壘横の突出部もその可能性が検討され（高松市2016）、筑前大野城跡にもありそうであると考えられている。

このような雉に関しては、中国・朝鮮半島に類例があるのであるが、車勇杰氏によれば、百濟地域の雉は横長型で、備中鬼ノ城や対馬金田城跡のものは百濟型と考えられることである（車勇杰氏のご教示による）。

ちなみに、百濟最後の扶余羅城の東側城壁線には2ヵ所の雉が検出されている。北羅城雉城は長さ13.1m、奥行1.1～1.4m、高さ約10m？（扶余郡文化財保存センター2013a・b）、東羅城雉城は長さ22.4m、奥行5.3m、高さ約5～6m（図11-1、百濟古都文化財団2018）である。ともに横長型であり、備中鬼ノ城や対馬金田城跡の雉は車勇杰氏のご教示の通り百濟型でよさそうである。

また、備中鬼ノ城の角楼は正面から見て城壁（石垣と土壘）の間に柱の痕跡が確認できる（図12-1）。このような石垣・土壘構築法は、日本列島の古代山城では基本的に見ることができないが、高句麗平壤大城山城や百濟地域の大田月坪洞遺跡（図12-2・3）など高句麗と関わると考えられる山城でみることができる。

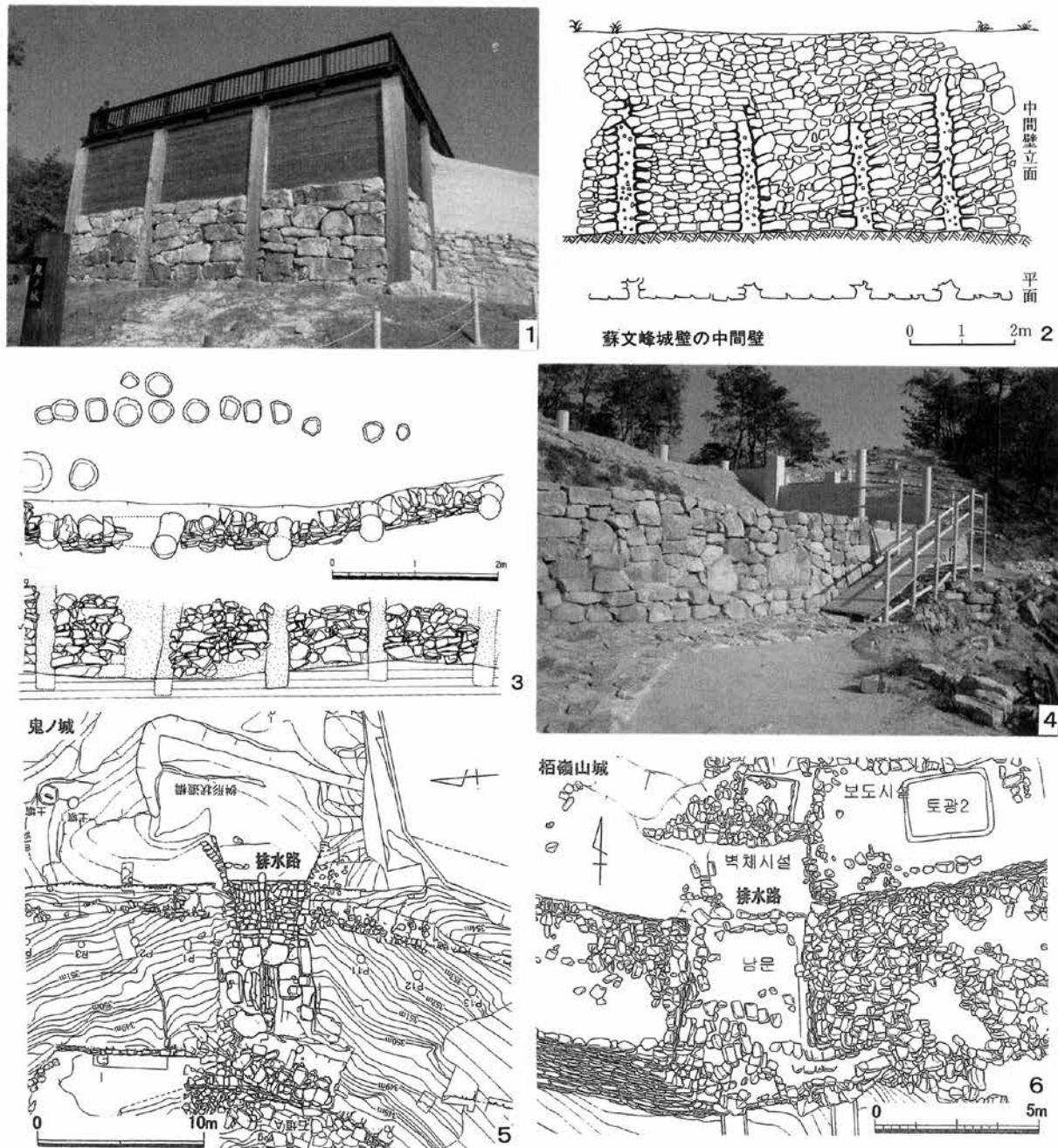


図12 朝鮮半島と日本列島の城壁内の柱痕跡・懸門・甕城
 1.備中鬼ノ城角楼 2.平壌大城山城跡蘇文峰 3.忠清南道大田月坪洞遺跡
 4.5.備中鬼ノ城北門跡 6.忠清南道栢嶺山城跡南門城

②門

平門と懸門 古代山城の門は基本的に城外から城内へ多少の傾斜はあるにしてもそのまま入る「平門」と考えられていた。しかし、讃岐屋嶋城跡において門に段差がありそうであることが確認され、備中鬼ノ城の発掘調査においても段差のある門跡が確認され（図12-4・5）、朝鮮半島の山城の「懸門」ではないかと注目されるようになった（車勇杰2016）。そしてこのような視点から各地の山城の調査が進められ、現時点では上記2カ所のほか、対馬金田城跡、筑前大野城跡でも懸門が確認されている。ちなみに城外面と門床面の高さの差は、讃岐屋嶋城跡城門跡は約2.5m、備中鬼ノ城北門跡は約

1.6m、対馬金田城跡三ノ城戸は約1.6m、筑前大野城跡北石垣城門跡は約1.4mである。

朝鮮半島の懸門を整理した向井一雄（2016）は、懸門の高さ（城門前面石垣高）に注目して、3mを超えるものが多い新羅から、1.5m程度が多い百濟を経て、日本列島の古代山城の懸門へという伝播ルートを想定している。

門の平面的特徴：甕城・枱形 甕城・枱形のよう平面構造を持つ門跡は讃岐屋嶋城跡、備中鬼ノ城北門跡（図12-5）などで確認されている。どちらも懸門で、城内に入ったあと、まっすぐ進むことができず、一度左に曲がってしか入れないようになっている。このような構造の門は百濟の錦山柏嶺山城南門跡（姜鍾元ほか2007）に見ることができる（図12-6）。

讃岐屋嶋城跡や備中鬼ノ城のような全面的な調査を経たものではないが、筑前大野城跡の懸門である北石垣城門跡もその地形を見ると、同様の構造になっていると思われる。また、筑前大野城跡の太宰府口城門跡の場合は、門内を通過したのち同じように直進できないように掘立柱の板塀のようものが作られていたことがわかっている。このような板塀などによる遮蔽装置は備中鬼ノ城西門跡にも見られ、同南門跡も門を通過して石段を登ると前面に土と石の壁があり、直進はできないようになっている。

敷石・排水溝 対馬金田城跡、備中鬼ノ城、讃岐屋嶋城跡と大野城跡觀世音寺城門跡の床面には敷石があり、対馬金田城跡と讃岐屋嶋城跡ではそれらが階段をなすこと、また備中鬼ノ城北門跡（図12-5）と讃岐屋嶋城跡ではその下部に排水溝があることも確認されている。

朝鮮半島では石敷きの門としては、高句麗平壤城内城平壤神社門跡、新羅明活山城北門跡、百濟錦山柏嶺山城南門跡（図12-6）など朝鮮半島三国に見られるが、百濟では柏嶺山城以外はよくわかっていない（向井2016）。

門礎石：唐居敷・礎石 城門に関する重要な遺物が門礎石である。掘立柱の柱を添える唐居敷と上に柱をのせる礎石がある（図21-1、向井1999）。前者は筑前大野城跡、筑前水城跡、肥前基肄城跡、肥後鞠智城跡、周防石城山神籠石、備中鬼ノ城、播磨城山城跡、讃岐城山城跡で確認され、九州のものは円形の柱が添えられるように丸く割り込まれており、瀬戸内海沿岸地域のものは基本的に方形の柱が添えられるように方形に割り込まれている。ただ、備中鬼ノ城の東門跡の唐居敷は円形に割り込まれている。また周防石城山神籠石と播磨城山城跡、讃岐城山城跡には方形の割り込みと方立、蹴放の段差などは作られているが、軸摺穴がないものがあり、讃岐城山城跡では柱を添えるための方形の割り込みが貫通していないものもある。少なくとも讃岐城山城跡には未完成の唐居敷が存在し、未完成の

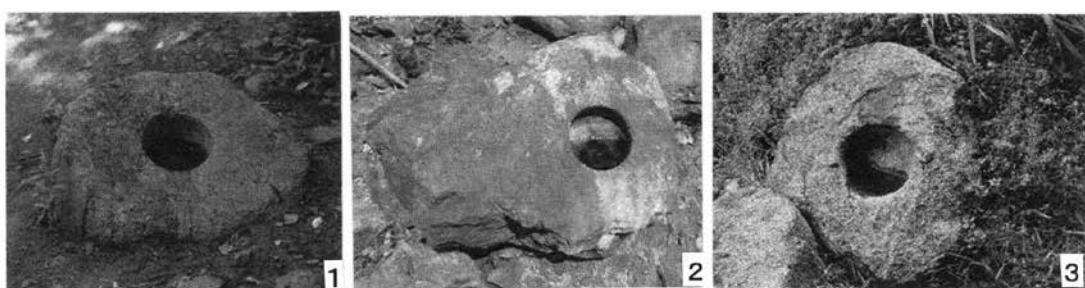


図13 朝鮮半島と日本列島の円孔礎石
1.吉林省龍潭山城跡 2.対馬金田城跡二ノ城戸 3.飛鳥酒船石遺跡

門があったものと推測される。周防石城山神籠石と播磨城山城跡の唐居敷に関してはこれで完成形の可能性もあるが、未完成品である可能性もある。また、讃岐屋嶋城跡では立派な石組みの門跡が確認され、一部柱穴跡が検出されているが、石製の唐居敷は検出されていない。流出してしまった可能性と木製唐居敷の可能性が推測されている。

一方、柱を石の上に載せる礎石は、対馬金田城跡（図13-2）、筑前大野城跡で確認され、播磨城山城跡と大和酒船石遺跡（図13-3）にもその可能性のあるものがある。筑前大野城跡太宰府口城門跡の礎石は唐居敷使用門の改修時に使用されており、8世紀前半のものと考えられている。播磨城山城跡のものはよくわからない。大和酒船石遺跡のものはもし酒船石遺跡の石垣・土壘に伴うものであるならば、7世紀中頃まで遡ることになる。対馬金田城跡の礎石に関しては、石壘の城門に伴うものと城内土壘のビングシ門跡に伴うものすべてが同じグループのもので、城内土壘が外周の石壘と同じ時期のものか、それとも遡るのかによって使用時期に幅が出てくる。少なくとも現時点まで対馬金田城跡では8世紀に入る土器などは出土しておらず、ビングシ門跡礎石が遡るならば、筑前大野城跡の礎石建物の門よりも古い段階に礎石建物の門が建てられていたことになる。

朝鮮半島では、いずれ発見されるものと思っているが、掘立柱を添える石製の唐居敷はこれまで確認されていない。木製の唐居敷がおもに使用されていたのであろうか。讃岐屋嶋城跡の城門跡では掘立柱の柱穴は検出されているが、石製唐居敷は検出されていない。朝鮮半島で推測されている木製唐居敷を使用していたのであろうか。

また、酒船石遺跡の円形の孔のみをあけたものの類例は朝鮮半島では、高句麗吉林省龍潭山城で実見したことがある（図13-1）。

門の建物：掘立柱建物・礎石建物 今述べた唐居敷と礎石を使用した門のほかに、唐居敷を使用しない掘立柱建物の門が肥前おつぼ山神籠石東門跡などで想定されている。ただ柱穴が大きくなり、門部分の城壁構築用の柱穴という考え方、門の柱と工事用支柱を兼ねたものという考え方もある（山口2003註19）。

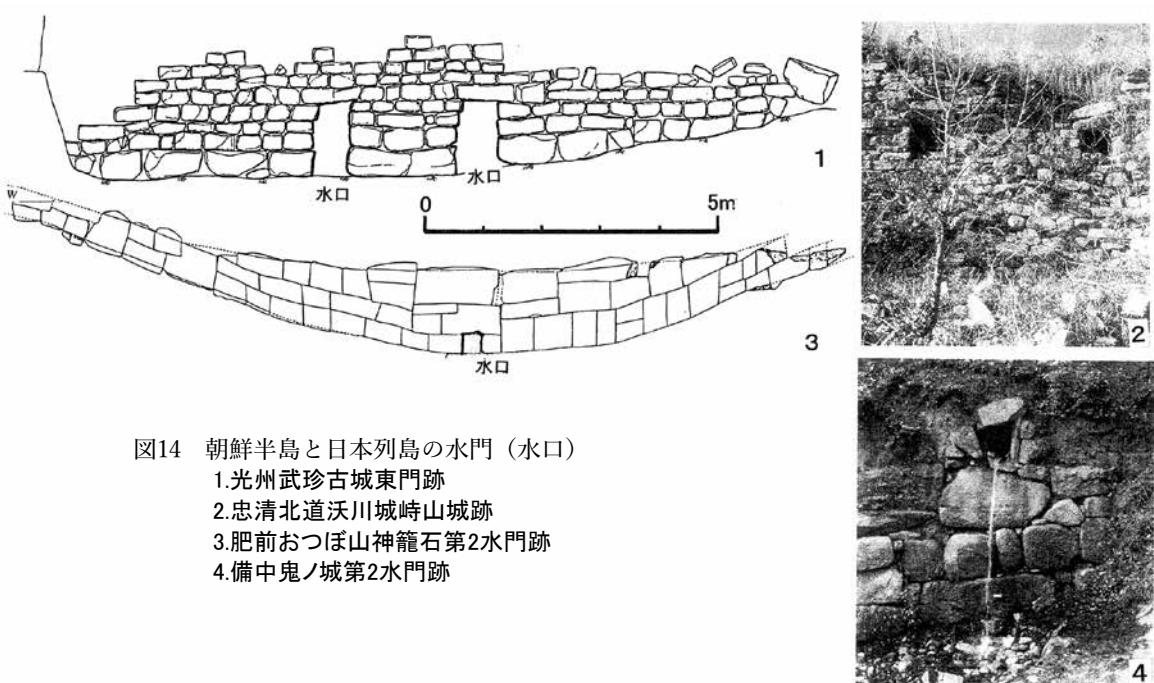


図14 朝鮮半島と日本列島の水門（水口）
 1.光州武珍古城東門跡
 2.忠清北道沃川城崎山城跡
 3.肥前おつぼ山神籠石第2水門跡
 4.備中鬼ノ城第2水門跡

この肥前おつぼ山神籠石以外には神籠石系山城で上記の唐居敷関連のものを除くと明確な門跡は確認されていない。

水門 城内の水は基本的に谷部に排水溝を作つて流出させている。通水施設を持たず、そのまま石壘・石垣の間を自然に流れ出るようにしたものも備中鬼ノ城などで確認されているが、西日本の古代山城では一般的に、土壘や石壘の下部に排水溝を作つたといわゆる「水門（水口）」がある。その通水口の数は一つの石壘に1ヵ所の例が多いが、2、3ヵ所のものもあり、横に、上下に、また斜めに並ぶものも見られる（図14）。

この排水溝の床面は、一般的には城壁の最下部、地山面をそのまま利用するものがほとんどで、単独の排水溝が地山面から少し高い石壘や土壘内に確認されるものが筑前大野城跡、豊前御所ヶ谷神籠石、備中鬼ノ城などで確認されている。豊前御所ヶ谷神籠石では現在の外面の床面から数十cmのところに底石を少し突出させ、その側面に側石を立てて丈夫な排水溝を作つてある。備中鬼ノ城では石壘の上面に排水溝を作り、その上に土壘を載せている（図14-4）。このような排水溝の高さが何らかの意味を持つのかよくわからないが、百濟地域には地山を床面に利用するものが比較的多く見られる。

（3）内部施設

①八角形建物

古代山城においては、掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出され、管理棟、倉庫、兵舎、作業小屋、祭祀関連建物などの用途が推測されている。これらの掘立柱建物と礎石建物は一般的に平面形が長方形をなしており、古代山城築城以前の宮殿や一般の建物との区別はできない。その中にあって注目されるものが肥後鞠智城跡の八角形建物跡である（図17）。2棟確認されている。どちらも掘立柱建物がま

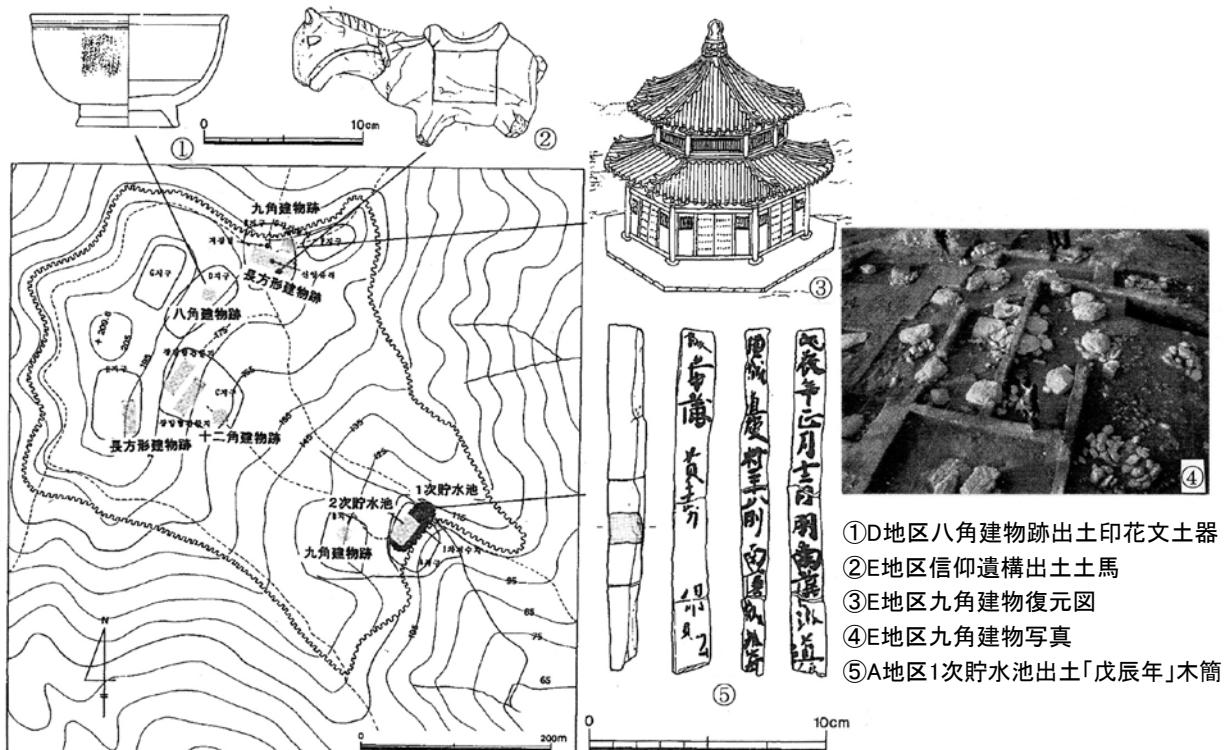


図15 京畿道河南二聖山城（1/8,000）と出土遺物ほか

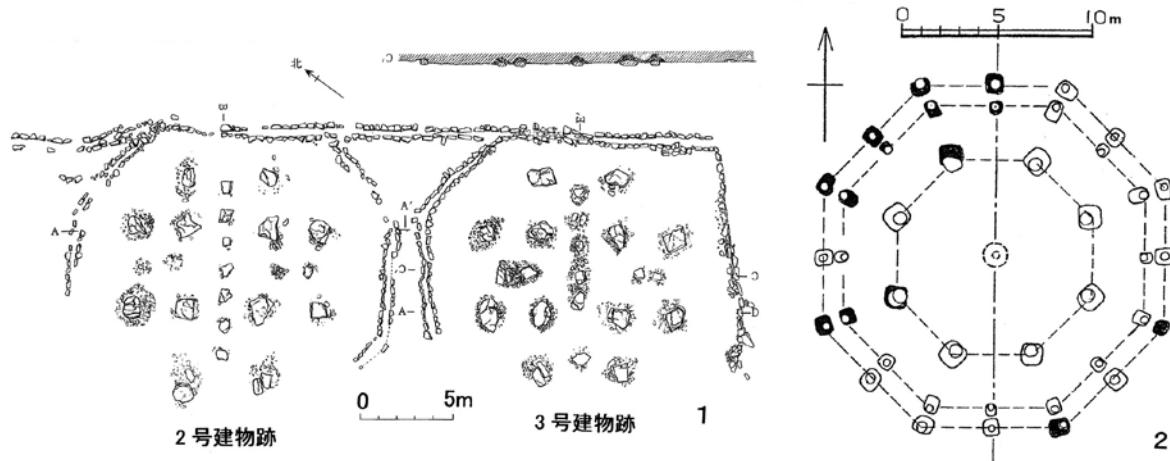


図16 高句麗集安丸都山城八角形建物（1）と摂津前期難波宮西八角形建物（2）(1/400)

ず建てられ、のちに掘立柱建物または礎石建物に建て替えられている。柱の配置は中央に心柱に該当する柱穴があり、そこから南側建物跡（32・33号建物）は柱列が3重に、北側建物跡（30・31号建物）は2重に、そして、放射状に配されている。時期は7世紀後半で、素弁八葉蓮華文軒丸瓦が関連する丸瓦・平瓦とともに葺かれていたと考えられている（熊本県2012）。

日本列島の八角形建物は古代寺院では、大和法隆寺東院夢殿と大和崇山寺八角堂が現存し、大和興福寺北円堂の前身の円堂院などが記録で確認できるが、いずれも8世紀のものである（向井2014）。また八角形の塔としては、山背櫻原廃寺の塔が発掘調査で八角形であることが確認され、大和西大寺（8世紀）

の塔も記録と遺構で八角形であることが確認されている。これらのなかで最も遡る可能性があるものが山背櫻原廃寺の八角塔跡である。細かな創建時期は分からぬが、寺は7世紀中頃の創建と考えられ、塔もその時期の可能性がある（亀田2002b、p.446）。そうすると、現時点では肥後鞠智城跡の八角形建物とほぼ同時期の日本列島最古段階の八角塔となりそうである。軒丸瓦の文様は高句麗新羅系のものである。軒平瓦は無文軒平瓦で、顎面に軒丸瓦と同じ文様を押した顎面施文軒平瓦で、顎面施文軒平瓦としては、最古段階のものと推測される。

八角形の塔の系譜については、一般的に平壤清岩里寺跡（5世紀）など高句麗寺院の塔につながると考えられている（田中2014）。高句麗の2番目の都とされている中国吉林省集安の丸都山城の城内にも八角形建物跡が2棟ある。時期ははっきりしないが、周辺で出土している瓦は6世紀後半～7世紀のものである。ただ、柱の配置は心柱を中心とした放射状配置ではなく、井桁状配置をしている（図16-1、吉林省・集安市2004）。

櫻原廃寺の八角塔は寺院建物や伽藍配置研究などによれば、今述べたように高句麗寺院との関係を考えるのが一般的である。ただ、基壇は瓦積基壇で、これは百濟との関わりが推測され、また、この地域は渡来系氏族の秦氏が力を持っていた地域である。

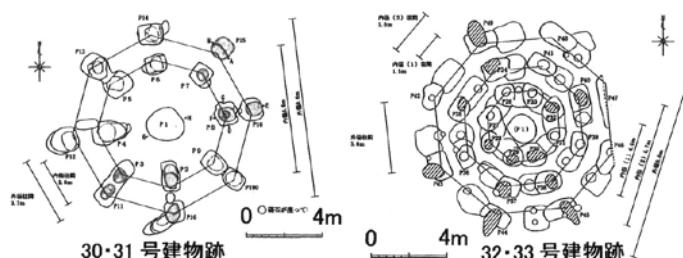


図17 肥後鞠智城跡の八角形建物跡 (1/400)

一方、古代寺院以外では、摂津前期難波宮の東西の八角形建物跡（図16-2）が7世紀中頃まで遡る最古の八角形建物跡と考えられている（積山2014）。柱配置は3重の柱列が同心円状に配されている。ただ、近年この八角形建物は天武天皇代のものではないかという意見も出されている（泉2018、湊2022）。地方では上野三軒屋遺跡に掘立柱建物（のちに礎石建物）の八角形建物跡がある。この遺跡は上野国佐位郡正倉跡として国の史跡に指定されている。7世紀後半に造営され、9世紀後半まで維持されたようである。平安時代の1030年頃に作成された「上野国交替実録帳」の佐位郡正倉の項に記された「八面甲倉」がこの八角形建物跡に該当すると考えられており、倉庫と考えられている。建物の柱の配置は、井桁状に配され、高句麗集安丸都山城の八角形建物跡と同じ柱配置で、鞠智城跡の八角形建物跡のような放射状配置ではない。

それでは、肥後鞠智城跡の八角形建物のルーツはどこか。筆者は現時点では韓国京畿道二聖山城の八・九角形礎石建物（図15、7世紀後半～8世紀：金秉模・沈光注1988、漢陽大学校博物館2006）や忠清南道公山城の十二角形礎石建物など古新羅・統一新羅の多角形建物がそのルーツの可能性を考えている。

②貯水施設

貯水施設遺構は、肥後鞠智城跡、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石、讚岐屋嶋城跡、そして筑前大野城跡などで確認されている。籠城するには当然無くてはならない施設である。肥後鞠智城跡の貯水施設では堤防状遺構と岩盤掘削堰堤が検出され、備中鬼ノ城の貯水施設では土手状遺構が調査され（図18-2）、貯水機能とともに城壁の破損防止のために使用された可能性が考えられている。この2ヵ所のほかに、豊前御所ヶ谷神籠石の貯水施設推定地は未調査であるが、その可能性は高い。讚岐屋嶋城跡の貯水施設に関しては、一部が発掘調査されただけで、詳細は不明であるが、地形的には堤防状（土手状）遺構を持つ貯水施設がいくつかつながって築かれていたものと推測される。さらに筑前大野城跡では鏡ヶ池と呼ばれる場所があり、現在も水がたまっている。

日本列島の古代山城の貯水施設は大野城跡の鏡が池のようなため池状のものとそのほかの例のような谷部の低いところに堤防状のものを構築し、水を溜める構造のものがある。堤防状施設については、鞠智城跡例のように土で積み上げたり、削り出して築いたものと、備中鬼ノ城のもののようにそれに石を貼ったものがある。堤防状遺構の奥側（池の両側）は自然の土の斜面がそのまま使用されている。鬼ノ城の土手状遺構は2ヵ所調査されたが、城内の地形をみると、ほかにも同様のものはあるようで、さらに第1水門貯水池と呼んでいるものはやや小型で土手状遺構はないようである。大野城跡の鏡が池のグループのようである。

朝鮮半島の山城で確認されている貯水施設は方形や円形、橢円形などの形で、石組によって壁を構



図18 朝鮮半島と日本列島の貯水施設

- 1.大田鶴足山城跡
- 2.備中鬼ノ城土手状遺構1

築している（図18-1、全赫基2022）。日本列島の山城の貯水施設のような自然の土壁を利用した例は分かっておらず、今後類例が発見されるものと思うが、現時点では朝鮮半島のどの地域の貯水施設の影響を受けて日本列島の貯水施設が出来上がったのかはよくわかっていない。

3. 渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺物

古代山城出土遺物には土器、瓦、土製品、鉄製品、青銅製品、木製品など多様なものがあるが、7世紀段階の古代山城築城時に新たな渡来系技術を使用して作られたものとして、区別しやすいものは瓦である。門の扉に使用された軸摺金具も新たに朝鮮半島からもたらされた技術による可能性がある。

瓦 古代山城において瓦がまとめて出土している城跡は、筑前大野城跡（665年築城、698年繕治）、肥前基肄城跡（665年築城、698年繕治）、肥後鞠智城跡（698年繕治）である。ただ、その初期段階のものは、665年頃の築城時のものか、それとも698年の繕治工事段階に使用されたものか、明確な識別はできていない。そしてそれが、それ以前のその地域にあったものか、畿内などから伝えられたものか、朝鮮半島からの新たな情報や技術によって作られたのか厳密な区別は難しい。

7世紀末以前のこれらの瓦については小田富士雄が古くから検討している（小田1977a・b、2013、2016など）。図19が、小田（2016）が政序I期とした瓦で、大野城、基肄城、鞠智城などで出土した单弁（素弁）蓮華文軒丸瓦である。栗原和彦（2000）の分類をもとに、蓮弁の文様から大きく鎧弁グループ（030・032・033）とかえり弁グループ（020A・020Ba）に分け、I類（大野城主城原033型式・基肄城I式）：①段階：665～670年、II類（大野城主城原020A型式）・III類（020Ba型式）・IV類（032

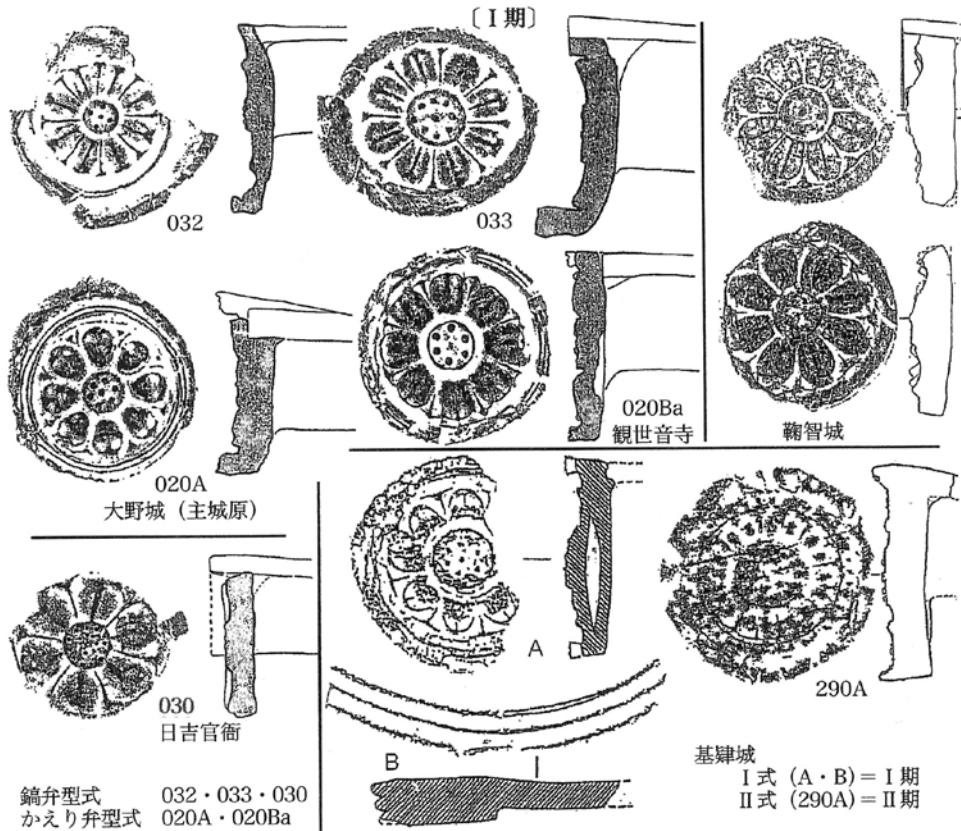


図19 北部九州古代山城出土瓦の小田富士雄分類

型式) : ②段階: 670~689年 (~③段階: 689~700年頃) としている。このうちIII類は觀世音寺などの寺院においても使用され、8世紀代まで使用されている。同様に基肄城I式の系譜の軒丸瓦は豊前地方で8世紀前半まで使用されている。

これらの小田政序I期の軒丸瓦の系譜であるが、かえり弁軒丸瓦 (020A・020Ba) については、古くから小田は「百濟系单弁軒丸瓦」と呼び、大和坂田寺経由の百濟系軒丸瓦としている (小田1977a・b)。鎬弁軒丸瓦 (030・032・033) については、大和豊浦寺関連の瓦を経由した高句麗百濟系としている (小田2013)。

つまり、いずれのグループの瓦も畿内を経由した百濟系と高句麗百濟系とされている。そして、鞠智城跡の創建年代について、対馬金田城築城と同時期の第2次防衛構想に入っていたが、なぜか667年11月条の記載から漏れ、軒丸瓦についても大野城の鎬弁瓦 (033) を直接の祖型として作られたと考えている (小田2016, p.194・196)。

以上のように、小田は北部九州の筑前大野城と肥前基肄城と肥後鞠智城の軒丸瓦について、畿内経由の百濟系のもの、高句麗百濟系のものが北部九州のなかで展開したと考えている。

筆者も基本的にはこの考えに賛同しているが、鞠智城の軒丸瓦に関しては、「外縁の下半がない」という特徴が気になっている。瓦当部に出来上がった行基式丸瓦を被せただけの「丸瓦被せ技法」の軒丸瓦は日本列島では、筑前大宰府政序 (月山東官衙・日吉官衙・藏司官衙・国分松本遺跡出土、030型式: 7世紀後半~末)、肥後鞠智城跡 (7世紀後半~末)、武藏高麗郡高岡廃寺 (8~9世紀) でしか確認されておらず、朝鮮半島においても忠清南道千房遺跡 (7世紀後半) (公州大学校博物館1996) でしか確認されていない (図20)。

忠清南道は旧百濟地域であり、この千房遺跡を百濟寺院と考えることも可能であるが、出土軒丸瓦の文様は古新羅系で、筆者は660年の百濟滅亡後に新羅瓦を用いて創建された新羅寺院と考えている。ということで、類例が少なく、不確実ではあるが、丸瓦被せ技法は新羅系の技法ではないかと推測している。さらに大宰府政序関連遺跡で出土している030型式の軒丸瓦は6弁であり、百濟瓦にはほとんど見られず、高句麗瓦や新羅瓦が多い。そして、鞠智城跡の軒丸瓦は8弁ではあるが、中房のまわりに溝を持つ。この特徴も新羅瓦に比較的見られる特徴である。また、遠く関東の武藏高岡廃寺の瓦は蓮華文がかなり崩れ、8~9世紀のものと考えられているが、中房内蓮子が1個という特徴は基本的に高句麗瓦の特徴であり、弁数も6弁である。

以上のように、肥後鞠智城跡の軒丸瓦に関しては、筆者は近年新羅系の可能性を考えている。古く島津義昭・鶴嶋俊彦ほか (1983) は百濟系と考え、筆者もそのように考えていたが、途中から新羅系

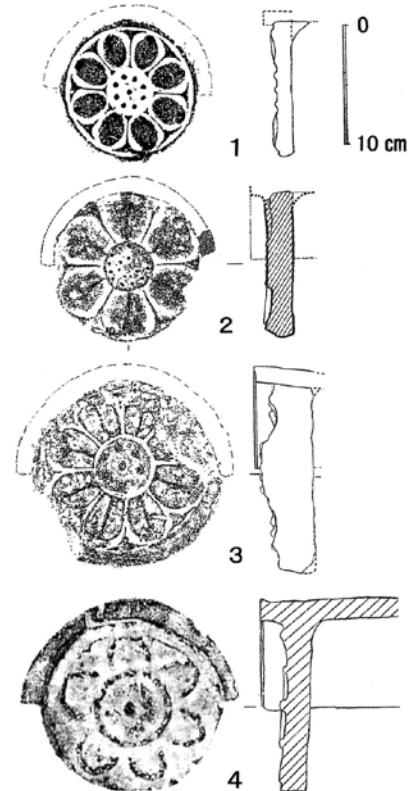


図20 日韓の丸瓦被せ技法の軒丸瓦 (1/6)
 1.忠清南道千房遺跡
 2.太宰府政序月山東官衙跡
 3.肥後鞠智城跡
 4.武藏高岡廃寺

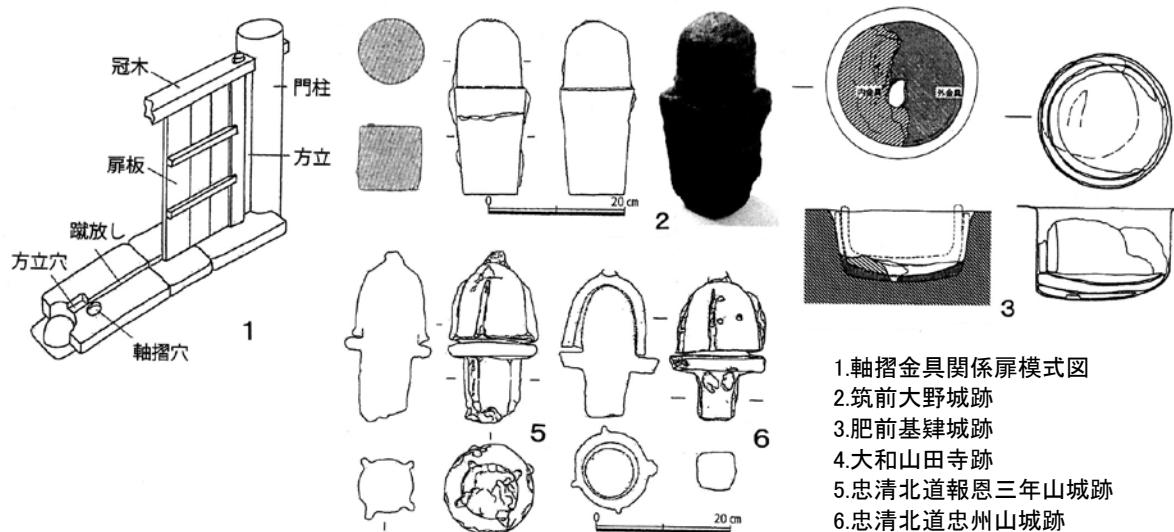


図21 日韓の軸摺金具関係資料

の可能性を考えるようになり、中山圭（2005）は百濟系・新羅系の可能性を考えている。

軸摺金具 軸摺金具は門の扉の回転軸に使用される金具で（図21）、日本列島では古代寺院の大和山田寺跡（641年造営開始～7世紀末創建完了？）東面回廊中央扉口（SX065）地覆石に穿たれた軸摺穴の中に残された金具（奈良文化財研究所2002、p.109-Fig.32）と古代山城では2006年に確認された筑前大野城跡北石垣城門跡金具と2014年に確認された肥前基肄城跡東北門跡の唐居敷の軸摺穴に残された金具がある（小澤2016）。朝鮮半島ではそれ以前から少しづつ確認されていたが、日本列島での確認によって両地域の山城の資料がさらに検討されることになった（山田2011、車2016など）。

この軸摺金具およびこれを使用した唐居敷の軸摺穴の形などを検討した小澤は大和山田寺跡東面回廊跡例と肥前基肄城跡東北門跡例、そして大野城跡の円形の浅い軸摺穴を持つ唐居敷（太宰府口城門跡推定Ⅰ期、坂本口城門跡、水城口城門跡など）と鞠智城跡の各城門の唐居敷などを7世紀中頃の日本列島初期のものとし、方形で深い軸摺穴をもつ大野城跡北石垣城門跡・小石垣城門跡・クロガネ岩城門跡・太宰府口城門跡Ⅱ期唐居敷、備中鬼ノ城の方形軸摺穴唐居敷などを7世紀後半～末頃に比定している。そして、前者は百濟系、後者は新羅系と推測している。

大野城跡北石垣城門跡出土の軸摺金具（図21-2）は鋳鉄製品で、7世紀以前の舶載鉄製品を除くと最古段階のものとなる可能性があり、大野城築城・繕治段階に百濟からの渡来人やそれ以前の渡来系の人々によって作られた可能性があるのである⁽²⁾。

4. 渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構・遺物の系譜

これまで、古代山城にみられる渡来系の知識・情報・技術について、遺跡・遺構・遺物を対象に簡単に整理してきた。以下、それらの系譜について簡単に整理してみたい（図22）。

まず、筆者は西日本の古代山城の発注者はヤマト王権と考えている。次に、具体的な場所の選定はだれが行ったのか。663年の白村江の戦いにおける敗戦を契機として、664年に筑前水城、665年に長門城、筑前大野城、肥前基肄城が築かれ、そして667年に対馬金田城、讃岐屋嶋城、倭国高安城が築かれ

た。小田富士雄は肥後鞠智城もこの時に築かれたと考えている。筆者も備中鬼ノ城はこの667年頃に造営されたと考えている（亀田2009）。朝鮮半島から大和までの陸・海の交通の要衝に山城を築く意図があり、備中鬼ノ城もこの意図に沿って瀬戸内海の東西交通の要衝である吉備のこの地に屋嶋城とともに築かれたと考えている。

そうすると、備中鬼ノ城の場所を選んだ人物は、少なくとも山城を使っての防御体制を理解している人物と考えられる。筆者はこのような山城の配置を考え、防御網を描くことができた人物は純粋な倭人ではなく、『日本書紀』天智天皇4年（665）条の百濟滅亡前後に日本列島に渡って来た將軍・貴族たち、またはそれ以前に日本列島に来ていた渡来系の人物、その子孫たちであったと考えている。達率憶禮福留と達率四比福夫のような人物が備中鬼ノ城築城に関わり、指導して選地・縄張などを行ったのではないかと考えている。

実際の工事はだれが行ったのか。吉備は瀬戸内海交通の要衝であり、選地・縄張を行った達率クラスの人物がこの地に張り付いて指導し、造営した可能性も十分考えられるが、やはり実際の工事においては、現場監督のような現地で指導する人物が必要である。少なくとも、この地の陸路・海路などの交通網、土地の様子を知る人物が必要である。つまり、このような現場監督、現地指導者には、將軍たちの補佐クラスの人物と地元のそのようなことを手伝うことができる人物、渡来系の人々がいたと考えることが素直であろう。

こうして、実際の築城に必要ないろいろな技術者、土壘を築く、版築を指導する、足場を組む、石材を加工する、水門を含めた石積み城壁の石を積む、門を建てる、角楼を造る、城内の管理棟・倉庫を建てる、それらの工事に使用する鉄製工具類を作る、工事に必要な土・石・木などの素材、実際の作業を行う人々をどのように集めるのかが、現場監督およびその周辺の作業チームの仕事になると考えている。このような総合プランナーはやはりある程度の経験者でなければ難しいのではないであろうか。

百濟から亡命してきた人々の中のこのような知識や技術を持った將軍、工兵部隊の責任者クラスの人物などが、地元のそのような作業を行うことができる技術者（おもに渡来系の人々、そして一部倭人）や実際の作業をする人々（おもに在地の倭人たち）を集め、築城していったのではないであろうか。

以上のような想定をすると、「備中國大税負死亡人帳」に記された人々やその親兄弟の中に備中鬼ノ城の築城や修繕に参加した人物もいたかもしれない。さらに地元である賀夜郡の人々だけでなく、備中國全域の技術者や作業者が動員された可能性は高いのではないであろうか。少なくとも近隣の都宇郡、窪屋郡、そして下道郡の人々は動員された可能性が高いと思われる。

備中鬼ノ城にはほかの古代山城には見られない多様な特徴がある。例えば、角楼の下部の石垣やその上部の版築の土壁に縦方向の柱の痕跡が残っている。このように城壁の中に柱痕跡が残る例は高句麗や朝鮮半島中部地域の高句麗と関わる可能性がある山城にみることができ、現時点では西日本の古

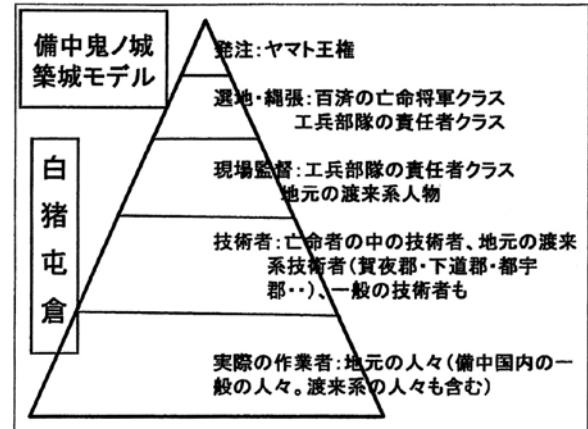


図22 備中鬼ノ城築城に関わった人々

代山城には見ることができず、鬼ノ城の築城技術に関する一つの特徴になっている。鬼ノ城の城壁土壘前面の石敷きについても現時点では最も近い例は忠清北道稷山蛇山城のものである。この山城については百濟のものと考えられているが、新羅のものではないかという考えもある。

備中鬼ノ城の築城については、弥生時代以前からのこの地の人々、5世紀頃におもに加耶南部地域から入ってきた渡来人たちの子孫、6世紀後半以降に畿内を経由して入ってきた新たな加耶（・新羅）系の渡来人たちの子孫、そして、白村江の戦い前後以降に入ってきたおもに百濟系の人々など、多様な人々が備中鬼ノ城築城に関与したことでの山城には見られない特徴的・個性的な山城が完成したのではないかと考えている。

北部九州の筑前大野城の唐居敷の軸摺金具について、小澤佳憲は創建時のものは百濟系、繕治のものは新羅系の可能性を示し、肥後鞠智城跡の軒丸瓦については、百濟系、高句麗・百濟系、百濟系・新羅系、新羅系の可能性が提示されている。

5. おわりに

以上、西日本の古代山城について、渡来系知識・情報・技術を意識して、述べてきた。660年の百済の滅亡、663年の白村江の戦いにおける敗戦、そして多くの百済系の人々の亡命・移住などを背景に、百済の亡命貴族（將軍）たちの指導のものに朝鮮式山城が築かれたという『日本書記』の記録などから古代山城は百済系の技術によって築かれたと一般的に考えられている。確かにそれはその通りであるが、具体的な遺構や遺物を細かく検討すると、少なくとも百済のみの技術で築かれたとは考えづらい。それまでに日本列島に渡って来ていた多様な朝鮮半島の人々も古代山城築城には関わっていたと考えることで、各地の古代山城の多様性や個性が説明できるのではないかと考えている。

小稿をなすにあたり、下記の方々にお世話になった。末筆ながら記して謝意を表したい。失礼ながら敬称は省略させていただいた（五十音順）。

小田富士雄、角田徳幸、高正龍、丹羽崇文、松波宏隆、向井一雄

[註]

- (1) 最近、広島県内で古代山城研究会の方々と地元の中世山城などを研究されている方が共同でその可能性がある場所を踏査され、現在その確認作業が進められている。公刊されたものとして、松尾洋平2023「古代山城 荻城（ぬばらのき）推定地の合同踏査について」『備陽史探訪』229、2-4 がある。
- (2) 古墳時代以前の鉄製品としては、比較的多く出土している各地の鋳造鉄斧以外には、兵庫県加古川市行者塚古墳（5世紀初め）と和歌山県紀の川市貴志川丸山古墳（5世紀）の鏡、大分県日田市ダンワラ古墳（5~7世紀）の金銀錯嵌珠龍文鏡（きんぎんさくがんしゅりゅうもんてつきょう、鏡は弥生時代のもの）などがあるが、極めて少なく、これらはいずれも舶載品と考えられている。6世紀末になると、古代寺院の湯釜などに鉄釜が作られ、使用された可能性があるが、具体的な事例としては奈良県川原寺北東部で7世紀末頃の鉄釜が検出されている（奈良文化財研究所2004）。本文中の山田寺東回廊の地覆石の軸摺穴に残された鉄製品が鉄製品であり、641年~7世紀末の創建段階のどの時期のものかにもより、さらに大野城跡の軸摺金具が665年の初築時のものか、698年の繕治時のものか。

のかにもよるが、いずれにせよこれらの資料が日本列島における鋳鉄製品の最古段階のものとなるようであり、大野城跡の軸摺金具は飛鳥地域から寺院の鋳鉄関係の工人が来た可能性もあるが、百濟からの亡命者のなかの工人が作った可能性はあるものと考えている。

〔引用・参考文献〕（50音順、韓国・中国の名前は、日本語読みして50音順に並べた）

泉武2018「前期難波宮孝徳朝説の検討」『権原考古学研究所論集』17、八木書店、66-77

入佐友一郎・小澤佳憲編2010『特別史跡大野城跡整備事業V』福岡県教育委員会、福岡県文化財調査報告書225

大阪府立狭山池博物館2021『狭山池のルーツ—古代東アジアのため池と土木技術—』

岡山県古代吉備文化財センター編2001『下庄遺跡・上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157

岡山県古代吉備文化財センター編2006『国指定史跡鬼城山』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告203

岡山県古代吉備文化財センター編2013『史跡鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236

岡山市教育委員会文化課編1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』

小澤佳憲2016「日韓の古代山城出土軸摺金具」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、74-76

小田裕樹・次山淳・豊島直博・竹本晃・市大樹・黒板貴裕・関広尚世2008「石神遺跡（第19・20次）の調査—第145・150次」『奈良文化財研究所紀要2008』90-107

小田富士雄1977a「百濟系单弁軒丸瓦考・その一」『九州考古学研究・歴史時代篇』学生社

小田富士雄1977b「百濟系单弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究・歴史時代篇』学生社

小田富士雄編1983『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書10、名著出版

小田富士雄編1985『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13、名著出版

小田富士雄2013「鞠智城創設考」『古代九州と東アジア』同成社、146-166（小田2012「第V章 第1節 鞠智城の創建をめぐる検討」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II—鞠智城跡第8~32次調査報告—』熊本県文化財調査報告276、407-426に一部補足）

小田富士雄2016「大宰府都城I期軒丸瓦考」『古文化談叢』75、九州古文化研究会、193-209

小田富士雄編2016『季刊考古学』136、雄山閣の中に、小鹿野亮「阿志岐山城跡」、小田富士雄「おつぼ山神籠石」、亀田修一「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」、下原幸裕「大野城（福岡県）」、杉原敏之「水城（福岡県）」、田中淳也「金田城（長崎県）」、田中正弘「基肄城（佐賀県）」、平井典子「鬼城山（鬼ノ城）」、矢野裕介「鞠智城（熊本県）」、山田隆文「高安城（奈良県）」、渡邊誠「屋嶋城（香川県）」などが収められている。

春日市教育委員会2000『大土居水城跡』春日市文化財調査報告書28

亀田修一1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3、pp.48-66

亀田修一2001「朝鮮半島の石造物と亀」千田稔・宇野隆夫編『亀の古代学』東方出版、56-75

亀田修一2002a「朝鮮半島古代山城の見方」編集代表西谷正『韓半島考古学論叢』すずさわ書店、545-575

亀田修一2002b「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』古代吉備研究会、429-454

亀田修一2009「鬼ノ城と朝鮮半島」岡山理科大学『岡山学』研究会編『鬼ノ城と吉備津神社—「桃太郎の舞台」を科学する』吉備人出版、58-71

亀田修一2012「対馬金田城小考」『百濟と周辺世界』成周鐸教授追慕論叢刊行委員会、810-830

亀田修一2014「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II—論考編1—』17-40

亀田修一2015「古代山城を考える—遺構と遺物—」岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城柵調査の現状』全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会、1-26

亀田修一2016a「西日本の古代山城」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社、574-595

- 亀田修一2016b「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、93-96
- 亀田修一2018a「日本列島古代山城土壘に関する覚書－版築・堰板について－」『水利・土木考古学の現状と課題II』ウリ文化財研究院（大韓民国）、325-348
- 亀田修一2018b「古代山城の成立と変容」熊本県教育委員会編『鞠智城・古代山城シンポジウム－古代山城の成立と変容－』1-11
- 亀田修一2021「古代山城と地域社会－備中鬼ノ城を中心として－」熊本県教育委員会編『令和2年度（2020年度）鞠智城座談会 地域社会からみた鞠智城』17-31
- 亀田修一2022「第2章 日本の考古学－西日本の古代山城－備中鬼ノ城を中心に－」亀田修一・白石純編『講座 考古学と関連科学』雄山閣、21-38
- 姜鍾元・崔ビヨンファ編2007『錦山栢嶺山城－1・2次発掘調査報告書－』忠清南道歴史文化院（韓国）
- 漢陽大学校博物館2006『二聖山城 二聖山城発掘20周年記念特別展』（韓国）
- 金善基・趙相美2001『益山猪土城試掘調査報告書』圓光大学校馬韓・百濟研究所（韓国）
- 金秉模・沈光注編1988『二聖山城〈2次発掘調査中間報告書〉』漢陽大学校博物館（韓国）
- 吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004『丸都山城』文物出版社（中国）
- 栗原和彦編2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館
- 九州歴史資料館編2009『水城跡』
- 熊本県教育委員会編2012『鞠智城跡II－鞠智城跡第8～32次調査報告－』熊本県文化財調査報告276
- 熊本県教育委員会編2023『鞠智城シンポジウム2022成果報告書 渡来系技術から見た古代山城・鞠智城』
- 百濟古都文化財団編2018『扶余羅城 東羅城IV－陵山里山区間 雉・城壁－』（財）百濟古都文化財団発掘調査研究報告69（韓国）
- 公州大学校博物館編1996『千房遺跡』（韓国）
- 国立公州博物館1999『大田月坪洞遺蹟』国立公州博物館学術調査叢書8（韓国）
- 国立扶余博物館2003『扶余羅城』国立扶余博物館遺蹟調査報告書10（韓国）
- 国立文化財研究所2002『風納土城II－東壁発掘調査報告書－』（韓国）
- 古代山城研究会1996「讚岐城山城跡の研究」『溝瀬』6、1-48
- 西条市教育委員会2016『史跡永納山城跡保存整備基本計画書』
- 島津義昭・鶴嶋俊彦ほか1983『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告59
- 車勇杰2016「韓国山城の懸門構造」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、63-68
- 鈴木拓也2011「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26、条里制・古代都市研究会、13-28
- 積山洋2014『東アジアに開かれた古代王宮 難波宮』新泉社
- 全赫基2022「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『令和3年度鞠智城跡「特別研究」論文集 鞠智城と古代社会』10、熊本県教育委員会、79-98
- 総社市教育委員会2005『古代山城鬼ノ城』、同2006『古代山城鬼ノ城2』
- 総社市教育委員会2011『鬼城山－国指定史跡鬼城山環境整備事業報告－』
- 大平村教育委員会2003『唐原神籠石I』大平村文化財調査報告書13
- 大平村教育委員会2005『唐原山城跡II』大平村文化財調査報告書16
- 高岡寺院跡発掘調査会編1978『高岡寺院跡発掘調査報告書』
- 高松市教育委員会編2016『屋嶋城跡－城門遺構整備事業報告書』高松市埋蔵文化財調査報告172
- 田中俊明2014「朝鮮三国における八角形建物とその性格」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II－論考編2－』31-51
- 中山圭2005「鞠智城出土の軒丸瓦－朝鮮式山城古瓦の一様相－」『九州考古学』80

奈良文化財研究所編2002『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報63
奈良文化財研究所編2004『川原寺寺域北限の調査—飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告—』
西住欣一郎2014「鞠智城跡貯水施設跡について」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II－論考編1－』83-95
藤澤一夫1981「難波宮八角建築の性格」財大阪市文化財協会編『難波宮址の研究 第7 論考篇』7-18
扶余郡文化財保存センター2013a『扶余羅城整備事業 扶余羅城—北羅城I—青山城試掘調査—』(財)扶余郡文化財保存センター発掘調査研究報告23(韓国)
扶余郡文化財保存センター2013b『2010扶余古都保存事業 扶余羅城—北羅城II—』(財)扶余郡文化財保存センター発掘調査研究報告27(韓国)
湊哲夫2022『難波の古代史』ブイツーソリューション
向井一雄1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27、地域相研究会、7-38
向井一雄2014「鞠智城の変遷」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II－論考編2－』75-105
向井一雄2016「西日本山城の城門構造」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、58-62
向井一雄2017『よみがえる古代山城』歴史文化ライブラリー440、吉川弘文館
村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古学ライブラリィ2、吉備人出版
森公章1998『「白村江」以後』講談社選書メチエ
山口裕平2003「西日本における古代山城の城門について」『古文化談叢』50(上)、九州古文化研究会、65-95
山田隆文2011「鉄製の門扉軸摺金具について」『勝部明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会、404-413

[引用挿図] (いずれも一部改変引用)

図1: 村上・乗岡1999、図2: 総社市観光プロジェクト課提供、図3・12-5: 総社市2005、図4・14-1・3: 亀田1995、図5: 中原文化財研究院2012『江華玉林里遺蹟』、図6-1・図7-3・図8-1~3・図9-1~3・図10-2・図11-2・図12-1・4・図14-2・4・図15-④: 亀田撮影、図6-2: 九州歴史資料館2010『大宰府 その栄華と軌跡』、図7-1: 金・趙2001、2: 岡山市1989、図10-1: 車勇杰氏提供、図11-1: 百済古都文化財団2018、図12-3: 東潮・田中俊明1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社、図12-3: 国立公州博物館1999、図12-6: 姜・崔2007、図13-3: 明日香村教育委員会2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』p.56、図15: 亀田2002a、図16-1: 吉林省・集安市2004、図16-2: 藤澤1981、図17・20-3: 熊本県2012、図18-1: 忠南大学校百済研究所2005『大田鶴足山城』、図18-2: 岡山県2013、図19: 小田2016、図20-1: 公州大学博物館1996、2: 栗原2000、4: 高岡寺院跡発掘調査会1978、図21: 小澤2016、図22: 亀田作成